

世紀末スラム小説におけるジェンダーと階級

ベザント、ギッシング、モリソン

田中孝信

はじめに

19世紀に入ると諸都市で顕在化してくる貧困への関心が、社会の中核としての地位を確立しつつある中産階級の中で高まる。特に「大不況」(1873-96)の時期には、熟練を必要としない臨時的な仕事が集中し一大スラムを形成していたロンドンのイーストエンドへ多くの中産階級人が足を運び、救済活動に従事する一方で、貧困の実態を記録した。しかし、数々の言説が対象に対して公平な態度を取りえたかという点、そうではない。そこには、無意識のうちにせよ、書き手の価値観や包括的ヴィジョンが反映されている。言い換えれば、中産階級の自己規定に寄与する象徴的イメージ、すなわち強い想像力が働いているのである。それに基づいて彼らは、労働者階級や貧民との差別化を図り、主体性を確立しようとしたのである。

本発表では、そうした想像的構築物に囚われた中産階級の姿を、イーストエンドとその近隣を舞台にした3つの代表的なスラム小説、ベザントの『あらゆる種類と階級の人々』(1882)、ギッシングの『どん底』(1889)、そして、モリソンの『ジェイゴの子ども』(1896)に見ていく。3名の作家が全て男性である点に疑問を持たれるかもしれない。確かに、ウェップやハークネスなどに見られるように、女性も慈善活動や文筆活動において大きな役割を果たしている。だが本発表では、資本主義社会で競争を生き抜き、それゆえに、ウェップが「知識人や資産家に芽生えた新たな罪の意識」(179)と述べているように、貧民に対して「罪の意識」を覚えた中産階級男性に焦点を絞って見ていくことにする。そうした眼差しには、階級のみならず、自ずとジェンダーやセクシュアリティの要素も入ってくる。そこで、本発表では、労働者階級女性や男性の主として身体表象に注目する。なぜなら、身体こそは世紀末の退化への恐怖を引き起こす可視化された場だったからである。

1. 貧民の「女性化」

『あらゆる種類と階級の人々』の中で、労働者階級は鈍感で受動的な存在として提示される。そして、イーストエンドの真の問題は「単調さ」にあるとし、住民に人間性を回復させるために、中産階級は自分たちの価値観を彼らに植えつけ、文化的に成長させなければならないと考えた。そのために必要なのが「ほんのもう少し人生の楽しさと優雅さ」(50)、すなわち娯楽だというのである。この父親的温情主義と文化的植民地主義に基づく具体的な仕組みが「歓喜の館」であり、ここで住民たちは読書し、美術・音楽・ダンスを学ぶことになる。こうした娯楽は、中産階級女性が嗜みとして身につけることが推奨されたものと一致していることから分かるように、労働者階級の男性は、体制への反抗や暴動に走らないように、女性化されるのである。特に、教化の対象として、ヒロインが経営する店の女性従業員に焦点が当てられている点に注目する必要がある。中産階級があらゆる価値判断の基準と見なす家族の要となる役割を、彼女たちが将来担うことが求められる。しかし、労働者階級の妻や母親たちには、だらしなく無気力で、時として性的にふしだらなイメージが付与されていた。それゆえに、早い段階での、若い女性への教化が必要とされたのだ。文化のこうした刷り込みは、労働者階級の購買欲求を高め、消費社会に彼らを巻き込むことにもなる。彼らの購買欲求を、あくまで中産階級の嗜好を模倣させながら適切な範囲で高めていくことは、彼らの政治的・社会的不満の捌け口を日常の消費製品の購入に見出させることになり、資本主義社会の安定につながるのである。このように文化を連続体と見なして労働者階級に伝搬しようとする中産階級の姿勢は、複雑な社会経済問題を単純なレベルの問題に置換しているに過ぎない。そこにはまた、イーストエンドに独自の文化があるという認識が欠落している。

ここで注意しておかなければならないのは、ベザントが対象としたのはあくまで救出可能な労働者だったということである。ブースの区分による「階級A：最下層」や「階級B：極貧」の者たちは、中産階級の文化的連続体という戦略から排除された、朽ちるに任せた存在だったのだ。

2. 女性の身体表象が帯びる曖昧性

『どん底』の舞台となるのは、かなりの数の「階級B」と「階級C：貧民」が住んでいる地域である。住民たちには、そこから這い上がろうとしても、抜け出す術はない。この閉鎖空間を通してギッシングは、ベザントが唱える文化の連続性がいかに不可能であることを示唆する。住民たちをこのような苦境に追いやった責任をギッシングは、富と余暇と特権に浴する上位の階級にあるとする。だが同時に、彼が労働者階級の性質に疑念

を抱いているのも確かだ。「傲慢な態度にもいろいろあるが、その中で最たるものは、最下層の貧民が当然の権利として慈善を受け取る時の態度だ」(253)と語って、貧民を糾弾するのである。

このような両価感情が最も的確に反映されているのが、労働者階級の女性描写なのである。途方もなく肉体的な存在というレッテルが、「規範」である中産階級男性から最も遠い労働者階級の女性に貼られたと考えられる。「ずるくて獰猛な動物」(144)と表現されたクレムは、都市の貧困が生み出した、進化の初期段階への先祖返りそのものなのである。しかし、ギッシングは彼女の帯びるエネルギーに魅せられもしている。「野蛮な美しさ」(120)と撞着語法を用いて表現されるとき、彼女の性的魅力や強靱な身体が強調されるのである。労働者階級の女性が帯びる官能性は、クレアラの身体にも見られる。以前から彼女を愛していたシドニーは、彼女と対面したとき、その「美しい体」(245)の動きに魅了される。理性的で克己心ある男性が、女性のセクシュアリティを眼前に突きつけられたとき、その虜になるのだ。さらに、クレアラの身体は、クレムと同じく熱を強く帯びている。彼女の内面が、「激しく無鉄砲な反抗心の燃え上がり」(201)といったように、熱っぽい状態に捕らえられているだけでなく、身体そのものが、「燃えるこめかみ」(293)に見られるように熱の存在を可視化する。既成秩序に対する彼女の反抗心を思い出すとき、この熱は、労働者階級の内にこもる爆発性のエネルギーを示していることになる。それは、シドニーのみならずギッシングをも魅惑するのである。

3. 男性の身体と退化

『ジェイゴの子ども』では、舞台となる空間の閉鎖性はギッシングの場合よりも強まる。貧民は、「階級A」と「階級B」に属し、ベザントが提唱する救済の可能性は完全に否定される。ヴィクトリア朝初期の社会問題小説が担った「共感の拡大」といった役割は消え、あるのはスラム住民に対する残酷なまでに突き放した自然主義の視線なのである。「ロンドンの最暗黒の穴」(2)と定義されたジェイゴという、「正常な」社会の監視が行き届かない空間では、社会的逸脱者や犯罪者が生み出され、主たる「産業」は窃盗となる。女性の身体表象についても、『どん底』における両価感情は影を潜め、暴力性とおぞましさのみが強調される。だが、最も注目すべきは、男性の身体表象である。暴力と女性嫌悪に彩られたジェイゴにおいて男性は、そのグロテスクさゆえに強い存在感を放つ。彼らの描写は世紀末の進化や退化論争と密接に結びつく。それは、古典的なものに自分自身のイメージと典拠を求める中産階級の個人主義的な肉体観念に対抗するのである。

ジェイゴの否定的描写は、都市の貧困と「正常な」社会との構造的関係が潜在的に孕む暴発の危険性について、中産階級が抱く不安感を表していると考えられる。確かに語りは、その地区の住民を絶滅寸前の種として提示する。だが、ジェイゴが隠れた主役として、無数の半獣半人を生み出し続けるのも事実である。物語の最後の方で、ジェイゴが取り壊されることになると、「ネズミ」(273)に譬えられていた住民は、そこから追い出された後、近隣を侵食し最終的に再生するであろうと示唆されるのだ。

むすび

これらのスラム小説を通して見えてくるのは、労働者階級は、リスペクtableな労働者と極貧の人々に分けられ、前者に対しては、社会経済問題を文化レベルの問題に置換するという支配者側の戦術を適用し、後者に対しては、読者に救済活動を促す一方で、そのおぞましさゆえに2つの相反する感情を引き起こしてしまうということである。すなわち、作者も読者も自らの内なる他者が共鳴する「おぞましきもの」に魅せられつつ、その分ますます恐怖と嫌悪を募らせ棄却しようとするのだ。スラムとその住民は中産階級の眼前から排除されただけであって、決して消滅したわけではないと、中産階級には思えたのである。貧民を更生させようといくら労力を注いでも、結局のところ徒労に終わるのではないかという危惧は拭えないのである。

こうした不安は、中産階級が貧民を「我々の一人になり得るかどうか」という基準で判断する限り、なくなりはない。そうではなく、貧困を環境の産物に過ぎず、自分たちで解決できるものとして捉え、貧民をあるがままに理解し受け入れなければならないのである。そのとき初めて貧民との間に連帯意識が生じ、不安が解消していく。それは、20世紀になって帝国から貧しい移民がイーストエンドに住み着き、多様性がますます深刻な問題となっている現代においても、喫緊の課題なのである。

引用文献

Besant, Walter. *All Sorts and Conditions of Men: An Impossible Story*. 1882. Chatto & Windus, 1883.

Gissing, George. *The Nether World*. 1889. Oxford UP, 1992.

Morrison, Arthur. *A Child of Jago*. 1896. Methuen, 1897.

Webb, Beatrice. *My Apprenticeship*. Longman, Green and Co., 1926.